

# 移民第二世代は学校経験をどう語るか（1）

## ーインドシナ系ニューカマーの事例ー

日本女子大学 清水睦美

### 1. 目的

本報告は、近年注目されつつある移民第二世代に焦点をあてつつ、さらにエスニシティ間比較を視野に入れた包括的研究の一部で、インドシナ系ニューカマー第二世代の学校経験の語りを、その困難さに注目して明らかにすることを目的としている。

### 2. 方法

本調査研究では、ポルテスらの研究（2001＝2014）を手がかりに、ベトナム・カンボジア・中国・ブラジル・ペルー・フィリピンにルーツをもつ1.5世や2世に対して、移動歴、学歴や学校経験、仕事歴や仕事経験、定位家族との関係、エスニックコミュニティ・出身国との関係、将来の見通しなど、かれらの生活を包括的に捉えるインタビュー調査を継続中で、本報告では、親世代がインドシナ難民であるベトナム24件、カンボジア16件をデータとし、特に対象者が語る小中学校での学校経験の語りに注目して分析する。

### 3. 結果

分析結果として、インドシナ系ニューカマーの第二世代が語る学校経験の困難さの特徴には、次の3つが析出できた。

第1の特徴は、一定数の対象者によって語られた壮絶で悲惨ないじめの経験と、それとの組み合わせで語られるいじめの状況に介入しようとしめない教師の姿勢である。「無視だけじゃない」「ごみ箱を投げ付けられたりとか、ランドセルをはさみで切られたりとかもした」「先生も、すごく最悪だったの。校長先生よ。見て見ぬふりしていたの。担任の先生もそう。見て見ぬふりをしている」という語りである。このように語られるいじめの中には、日本人生徒から外国人生徒に対するいじめだけでなく、エスニシティを同じくする外国人同士からいじめられていたと語られるものもある。

第2の特徴は、いじめのような困難さを語らない者たちに見られる傾向として、学校経験に対する記憶やその頃の感情に対する反応が薄く、特に教師に対して取り立てた印象をもっていないというものである。学校は「楽しかった」、友達の多さも「まあある」とはするものの、現在は、それらの友達とも「つながってない」と話し、先生に面倒をみてもらった経験も「あまりない」し、小中の先生ともに「(好きでは)ない」、学校での成績も「気にしてない」という語りである。

第3の特徴は、教師から面倒を見てもらったと回答するものの、そのような教師の関わりが、対象者のエスニシティにかかわる問題にまで届かなかったためか、学校ではルーツを隠し、親に対しては「遠足とか、授業参観とかは、あまり来てほしくなかった」と語るものである。このようなケールでは、異質性に対する教師の配慮を欠く同化的支援が、学校での居心地の悪さを作り出していることが確認できた。

### 4. 結論

第1・2の経験を語る者たちが共通して語る関連要因として、親の厳しさ、特に、暴力を伴いつつ子どもたちを家庭内に閉じ込める傾向が指摘できる。他方、第3の経験を語る者たちは、親世代の教育に対する無理解を語る傾向が指摘できる。このようにインドシナ系第二世代の学校経験の語りは、親世代の教育に対する態度の語りと一定の関連が見いだせた。

### 文献

Portes, A. & R. G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, New York: Russell Sage Foundation. (=2014, 村井忠政他訳『現代アメリカ移民第二世代の研究ー移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店.)

謝辞 本研究は科学研究費補助金基盤研究 (B) 26285193 の助成を受けたものである。